林業普及現地情報
2026-11号（通算570号）
令和８年11月16日
林業技術センター普及班
記述者　宮本　雅子

令和８年度岩手県指導林家等研修会の開催について

１　はじめに

林業技術センター普及班では、令和８年９月26日から２日間、岩手県指導林家、青年林業士、林業普及指導協力員及び林研グループ（以下「指導林家等」という）を対象とした研修会を、岩手県林業研究グループ連絡協議会と共催で開催したので、その内容を紹介します。

２　研修概要

養蜂や地域資源を活かした持続可能な地域づくりに取り組むNPO法人ＳＣＲ（宮城県富谷市）の活動を学ぶため、指導林家等11名が研修に参加し、活動拠点を訪問しました。



村上代表（前列左から３人目）と研修参加者で記念撮影

３　ＮＰＯ法人ＳＣＲ

ＮＰＯ法人ＳＣＲは、村上幸枝代表を中心に、多くの人に喜ばれる活動をしたいという想いをもった女性達によって15年前に設立しました。

ＳＣＲのＳはスマイル（どんな時も笑顔で）、Ｃはチャレンジ（考える暇があったら行動しよう）、Ｒはリレーション（一つ一つの出会いを大切に、人や自然と繋がっていこう）を意味し、地域の人々との交流や催しを通じて、心と体の健康を育む活動を行うとともに、自然環境の保全に対する意識の向上と世代間を繋ぐ持続可能な街づくりを行い、すべての人々が生きがいを持って生活できる地域社会づくりに寄与することを目的に活動している団体です。現在は、男性を含む42名が活動しています。

４　研修内容

（１）研修１日目

ＳＣＲの活動の歩みについて説明をいただき、活動拠点である「みつばちの里」を視察しました。



「みつばちの里」のニホンミツバチの巣箱
活動日には、外で炊いたごはんを皆で食べ、支え合いながら楽しく活動しているそうです。

（２）研修２日目

一部管理を受託している市営の大亀山森林公園での森林整備活動等について説明をいただき、公園内を視察しました。



当日は、公園の森林整備ボランティアの方々による伐採木の片付けや看板設置が行われていました。

５　ＳＣＲの活動

設立当初、会員の皆さんは林業とは無縁でしたが、それぞれの得意分野を活かし、木工教室などを開くなかで様々な人達と知り合い、「林業」と出会いました。

刈払いや伐木等の講習を受け、林業や間伐材普及の活動実績を重ねていく中で、２０１６年に養蜂と出会い、活動の幅が広がったと言います。現在は、「養蜂」、「みつばちの住む里山づくり」、「まちづくり地域活性化」の３つを主な活動として、自然と人との共生に取り組んでいます。

（１）養蜂

・きっかけは森林組合からの巣箱の製作依頼。同じ頃、行政を通じて民家の納屋に作られたニホンミツバチの巣をどうにかしてくれないか、と依頼が舞い込んだ。

・訳も分からず行ってみたが、初めて見る自然巣の大きさに衝撃を受け、捕獲・保護に挑戦。

・この時、採れたての蜂蜜の味に感動。

・保護したニホンミツバチを会員の裏山で育てることに。

・また同じ頃、富谷市から庁舎屋上でセイヨウミツバチの管理をしてもらえないかと相談を受ける。蜂蜜が採れるか確認する実証実験ということで、躊躇はしたが、誰かがやらなければ何も始まらないし、期限付きの３カ月ということもありチャレンジした。

・３か月で 50 kgの目標が、２か月で２００kgを超える蜂蜜が採れた。

・この成功から市の「とみやはちみつプロジェクト」が本格始動。市民参加型にして理解と協力を得ていきたいと提案し、現在は約30名の市民サポーターと共に活動。巣箱の管理・採蜜・瓶詰すべて市民共働。

・採蜜量は年々増え 600 kgに。

・ミツバチは環境指標生物とも呼ばれ、自然環境が良い場所でしか生きられない。植物の受粉を助けるポリネーターとして、森や農作物を支える重要な役割を持つ。

・幼稚園、小中学校等で独自にミツバチ教室を開催。ミツバチを連れていき、最初は怖いと言っていた子供も、最後には可愛いと、人気の出前授業に。大人向けにも、市で養蜂に取り組む理由や、ミツバチが生活にもたらす影響について理解を深めてもらう取り組みを大切にしている。

・市民皆で蜜源となる花を植え、手入れをして、ミツバチの住み良い環境も作っている。ミツバチを通して、自然の循環や環境の大切さを身近に感じ、応援してくれる市民が増えていることを日々実感。

・蜂蜜は、全国コンクールで入賞。地域の飲食店やお土産としても使われ、昨年からは念願の学校給食にも使われている。



採取した蜂蜜はビールやジュースにも利用されています。

（２）みつばちの住む里山づくり

・裏山で育てていたニホンミツバチが熊の被害に遭う。市内でも、荒れた里山林や耕作放棄

地が増え、農地や人の生活圏に熊が出没するという地域の課題が見えてきた。

・そこで、里山林と休耕田が広がる0.5haの土地を借り、「みつばちの里」と名前付け、生き残った一箱のミツバチを連れて、人もミツバチも住み良い環境づくりを目的に活動。

・休耕田を刈払い、鬱蒼とした竹藪を無我夢中で少しずつ伐り開き、野生動物と人との緩衝地帯を作った。

・竹藪を伐り開くと、隠れていたお茶の木やケンポナシ、ヤマザクラ等の蜜源となる木が次々見つかり、以前は実がならなかった果樹にも沢山の実がなるように。ミツバチだけでなく、様々な生き物が集まり、里山全体が季節の変化を感じられる場所に変化しつつある。



竹藪を伐り開き、姿を現した木々。花の時期には、羽音がブンブンと聞こえるくらいミツバチが集まってくるそうです。



竹藪を伐り開き、姿を現した池。整備してビオトープ化しオオサンショウウオも卵を産みに来ているそうです。

・毎月８のつく日にはボランティアの方々が集まり、花、野菜、果樹を育て森林整備を手伝ってくれる。

・採蜜体験の他、自然体験、農業体験も開催し、子供から企業・団体まで、ミツバチだけでなく人も集まり、繋がる居場所になってきた。

・不登校特例校の中学生や大人の引きこもりの方の自立支援の受け入れも行い、人と関わりながら少しずつ笑顔を取り戻していると実感。

（３）まちづくり地域活性化

・設立当初からイベント等を実施してきた思い入れのある大亀山森林公園で、ツリーハウスがあったらどうだという話を受け、面白そうと即決。市民皆で作ることを提案し、２０２４年に完成。

・以降、公園業務の一部委託という形で、森林整備やイベント開催、施設内に木育やカフェブースを設置。鬱蒼としたスギ林を伐採し、広葉樹や花を植えるなどして明るい蜜源の森づくりを展開。伐採木はチップや薪、施設の什器等公園内で活用。閑散とした寂しい場所から人々が集う場所になってきた。



当日は、公園の森林整備ボランティアの方々による伐採木の片付けや看板設置が行われていました。

６　研修を終えて

地道な活動を一つひとつ積み重ねながら、出会いを大切にし、何でも挑戦し、多様な人々とのつながりを広げていく姿から、森林の新たな価値の創出や異業種連携の可能性など、多くの学びを得ることができました。